

## 学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	高橋光子（早期修了予定者） 【比較社会文化学専攻 平成25年度生】	<p>本研究は、日本語や英語の修飾語について共時的・通時的文法化の諸相を明らかにしたものである。「文法化」というテーマは認知言語学の重要な概念であり、最近の言語学の中心的なテーマのひとつでもあることから、非常に関心を持たれ注目される研究であるといえる。本論文では、「決して」「構へて」や「hardly」等の特性を分析し、いずれも、語彙的意味の希薄化・漂白化、音声的・形態的言語実体の削減、統語的・文脈的変動性の消失などの通時的文法化の特性が示されることを例証している。また、日英の比較対照的考察も行い、文法化の共通点や相違点を論じている。共時的文法化についても、具体例を多く挙げながら、全く異なる意味領域間の類似性や近接性について分析し、具体的な意味を持つ語を基に、抽象的で主観的な意味を派生語へと写像する認知能力としてのメタファーの存在に言及する。そして文法化を言語変化のうちの一つと捉え、一般化しなければ共時的文法化には至らないことや、特殊な限定された意味ではない、“一般的”な基本語彙が文法化の対象となりやすい、ということまでまとめている。</p> <p>審査は3回行われ、第一回審査会では、術語の定義と説明が明確でない <b>hardly</b> が否定文脈に限定される理由と <b>hard</b> から派生した理由、通時的な多義性の喪失、等々について説明不足という指摘がなされた。また、論文全体の構成について、各章のバランスやつながりの悪さ、結論の浅さ、等々の指摘があった。修正版を対象とした第二回審査会では、修正はおおむね諒とされたが、さらに、分析語彙の選択理由、「決して」と <b>hardly</b> の違い、派生元の語の品詞の違い、「イメージ・スキーマ」や「共時」「通時」の違いの説明不足、等々の指摘がなされた。構成・形式面からも、各章の終わりに「まとめ」を書く、日英の否定副詞の「まとめ」を書く、目次や図表一覧を整える等々の指摘・要求があった。これらに従って、再修正版が作成され最終版として提出された。</p> <p>公開発表では、論文の内容を意味の漂白化、メタファーの働き、通時的研究の重要さなどいくつかの論点に絞って、わかりやすくまとめており、論としての筋が通ったものとなっていた。会場からの質問には適切な答えがなされ、発表者が研究内容について十分把握していることが示された。最終審査会では、最終版と公開発表の内容を合わせ検討した。その結果、本論文を学位授与に値するものと評価し、博士（人文科学）Ph.D. in Linguistics の学位にふさわしいものと判断して合格とした。</p>
論文題目	文法化についての共時的・通時的研究 —日本語と英語の修飾語の分析—	
審査委員	(主査) 高崎みどり 教授	
	森山新 教授	
	山腰京子 准教授	
	中西公子 准教授	
	加納なおみ 助教	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（可・<b>否</b>）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;">ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;"><b>エ.</b> 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	